リエゾン心身処方学の展開（1）

On the Expansion of the Liaison Approach for Psychosomatics (1)

丸　山　久美子*

Abstract

The purpose of this paper is to expand the previous study of Maruyama (2009) on the method and concept of the liaison approach for psychosomatics. Also, we have to consider on the social unrest and victim of children by parental divorce in developmental liaison psychosomatic point of view, and moreover to consider some kinds of thinking way of social life based on the metaphysics. This paper presents a liaison psychosomatic model of each fields in topological space.

Keywords：Developmental Psychopathology, Child Divorce, Torus of Topological space, Toxic Parents.

はじめに

リエゾン心身処方学を構築するための概念や方法に関する先の研究（丸山、2009）を踏まえて、特に本研究で取り上げるのは、今世紀の時代を特徴付ける家族の変容について心理学、教育学、社会学、サイコオンコロジーや精神医学的見地から考察する。なお、家族の存亡に関する日米の比較研究を行ったのは今からほぼ30年前のことで（丸山、1982）、当時アメリカでは第二次ヒッピー（Hippie）の時代といわれた若者文化が流行していた。彼らは、さながら、「サヴァンナの記憶」におどらされたかのように、人類誕生の時代にまで意識を変容させ、そこでの暮らしを彼らの楽園のように思い込んだ。基本的に、亜熱帯の草原であるサヴァンナには多くの天敵がいて、到底そこが楽園とは思い描けないのだが、彼らの想像する世界は何者からも自由になり、あらゆる束縛からの逃避であって、気ままな原始生活をすることが、最高の生活様式に思えたのである。本来ヒッピーの理念は「正義なきベトナム戦争」への反対運動に端を発し、愛と平和を訴え徴兵や派兵に反発した若者たちが中心で、初期の頃は薬物による高揚感や覚醒や悟りから出発し、各地にヒッピーの共同体を作り、若者たち中心に爆発的な人気をさらった。彼らは破れたジーンズをはき、髪を緑色に染め、薬物から生ずる幻覚を信じ、それによる精神解放によって彼らの存在意義を社会に訴え、一躍有名になり、伝統的な社会の制度を否定し、個人の魂の開放を訴えた。必然的に彼らは通常の家庭生活、「大草原の小さな家」から開放されることを望み、一夫一妻制を廃止、集団生活の中に家族は全て大きなヒッピーの共同体へと組みこまれ、昔の家族と同じように、たった一人の父や母ではなく多くの父や母が子どもの周辺に存在し、子ども達も誰が本当の父親であり、母親であるのかを認識しなかった。こうなると、所謂カルト宗教が量産される。伝統的キリスト教的価値観を否定し、むしろ東洋的思想や宗教が広く紹介され、その合間にカルト宗教が発生する。本来ヒッピーの価値観は「自然に帰れ」という自然保護活動家たちや思想家たちの通称であったが、そこに薬物が混在したために、幻覚症状が重くなり、多くの犯罪が発生する契機となった。それ以来、薬物取締り締り法が厳格に行われ、社会それ自体が次第に保守化したために、いったんヒッピーは衰退したかに見えたが、1960年代への回帰の風潮と共に、1970年代の後半になって、再びネオ・ヒッピー

* MARUYAMA, Kumiko
北陸学院大学　人間総合学部　社会福祉学科
心理統計学

と呼ばれる時代を迎えることになった。これらのヒッピーは同性愛やミーイズムの温床となり、その後のアメリカ社会に大きな禍根を残し、エイズ発症の汚名を着せられることになった。日本では「フーテンの寅さん」という映画がヒットした。

ヒッピーと同じように気ままな旅をしながら自由に生きる「フーテンの寅」という風来坊が、多くの社会的規範に縛られて生きているサラリーマン層の癒しとなった。だが、フーテンの寅さんには帰るべき家があるので、本来的なヒッピーとは若干その生活形態は異なるが、現代では帰るべき家を持たない人たちが次第に増加して、「孤独死」を遂げる老人たちの終末には、フーテンの寅さん時代の名残は全くない。

尚、心身処方学は心身医学と全く同じ文脈で用いられることが想定される。しかし、リエゾン心身処方学は、異分野において行動計量学的アプローチを用いる際に、核となる概念や方法が共通の認識に基づくことを強調したい。又、心理学者が共同で行う研究分野に Developmental Psychopathology（発達精神病理学）という研究がある。もっぱらそこでは子どもの発達上における心の精神病理を家族関係の視点から捉えるものである。臨床発達心理学が発達精神病理学と同義であるのならば、これは、幼児・児童期に形成された病理形成が青年期前期に発症するという従来の発達心理学の精神分析的アプローチと同じである。

それは、又、臨床発達心理学における発達は生涯発達をも含むもので、成熟し孤老期を迎えた老人が、幼児期に形成された精神病理をも顕現させることを意味している。

家族に縁の薄かった老人が回想する家族の思い出の中に、親、兄弟の影が常に付きまとっている。犯罪を繰り返す人間がすでに孤老期になって追憶するのも家族の影である。臨床発達心理学はこのようにして流れてゆく人間の一生を通して、いかに家族関係が重要な役割を果たしているのかを模索する学問である。

１：臨床発達心理学とリエゾン心身処方学の分水嶺

今日、家族を含めてその社会的環境が劣悪になっていることは十分に知られている。その第１の原因は両親の離婚によって子どもの精神状態が悪化していることに、どれほど人は気付いているかということである。児童虐待や孤独死がメデイアを騒がせても、離婚による子どもの痛みや精神病理にあまり関心が向かない。それではどのようにしてこのような社会現象としての離婚問題の解決に眼を向けることが出来るであろうか。人間発達の本質に関する理論的仮説の構築は、発達心理学、心身医学、教育学にいたるまで多くの研究が、個別に行われていた。ここに、発達精神病理学という独自の立場で子どもの精神疾患を研究した心理学者たちの考え方の基本前提を記述してみよう。心理学における世界観は、複数の現象を人間存在の実存的核心部分によって表象化し、「世界を何であると考えるのか」と「真実をどのように捉えるのか」の二つの問題設定によって記述される。「人間が世界に向かって何をなすべきか」、このような問いが、人間発達の本質的部分としての前提条件である。主要な世界のひとつである状況が、個人の発達のプロセスを考えるのに重要なものとして、多くの発達精神病理学者に受け入れられている。それでは、このような状況とは一体何であるか。状況とは、能動的に変化し続ける有機体と力動的に変化する発達の中で絶え間なく相互作用しあいながら、能動性とその変化がその本質とするテーゼから生み出されたものである。そのために、発達のプロセスを理解するには、直接には関連が見られない多くの微細な要素による影響を無視してはいけない。能動的ではない有機体による影響を仮定することも出来ない。この力動的な発達プロセスは、個人の持っている特徴（情動、認知体制）、これらの個人的特徴の相互交流、他者へのかかわりの質（家族関係、仲間関係、職場関係）、社会文化的環境的社会要素（文化、宗教、近隣）などが多様に関わりあいながら相互作用しあっている。特に、人間の発達という側面を考えれば、これは俗に言う「揺籠から墓場」までの発達段階の中でそれぞれに多様な仕方で相互作用しあっているものを集約し、一人の人間の発達のプロセスを調整しながら、時間と共に変化する人間性のありようを吟味することが、世界に何を求めるかという素朴な問いかけに対する回答であり、人間発達の本質である。人の行動は何らかの状況の中で起こっている。その状況が如何なるもので

あるかを、ただ表面的に眺めても人の現実的な心の動きを把握することが出来ない。とすれば、全人的に発達現象を捉えてゆく必要がある。たとえば、親子の間に情緒的不合理が生じて、旨く関係が形成できない場合、子どもは情緒不安定になり、親から拒否されているのではないかとおびえ、それを克服し安定感を得るためには、逆に親を重視せず、むしろ自分のほうから親との関係を断ち切りあえて親子関係を疎遠にする、そうすれば余計な心配事から開放されるように見えるが、長期的に見れば、親との愛情関係が不安定な子どもは親のみならず友人、近隣、仲間関係においても否定的な行動をとるようになる。子どもが成長して恋人との関係がうまくゆかなくなる場合がある。その場合のリスク要因として夫婦関係の劣悪な状況が子どもに与える問題を例をあげながら整理してみよう。

幼児期は太郎も花子もそれぞれの親から愛され愛着行動も同じでよく育っていた。

ところが、太郎の父親が解雇され、生活に困窮が生じ、母親はパートに出て働かなければならない事態となった。太郎はしだいに問題行動をおこし、躾もよくできていなかったから、反社会的行動を頻繁に起こしていた。一方花子は順調に育ち、両親との生活は安定し、夫婦関係もうまくいっていた。花子は両親から暖かく包まれて育ち、社会的適応能力も身につくようになった。4歳時点では花子は日常生活に適応し、たとえ家族の中で両親がけんかをする場合でも、落ち着いてよく考えて行動し、自分は愛されていると感じ、しかも自分は愛される価値があると感じていた。対照的に太郎は不安が強く、何かあると脅されているように感じ、実際に何も問題が起こっていないのに、問題が起こっているように感じ、どんな問題に対しても確信が持てずしっかりと取り組むことが出来なかった。

以上のように、家族ダイナミックスを考えるとき、親の離婚や離散が子どもの心理・社会的リスクを如何に増大させるかが理解できるであろう。

養育者の情緒的な受容性が低下する、子どもの躾が旨くできない、親が情緒的な問題を抱えている、離婚がらみで両親の間に葛藤がある、といったことは離婚によって生じたリスクを部分的に出来たとしてもそれが全てではない。離婚を経験した子どもの発達の個人差がこれらの理由だけで説明さえるわけではない。離婚によって子どもが晒される心理的・社会的リスクはほとんど中程度しか説明されてはいない。子どもが経験する離婚を取り巻く家庭のストレッサー（両親の喧嘩、両親の心理的苦痛など）、環境にまつわるストレスフルな出来事（引越し、所有物を手放すことなど）を全体として捉え、環境にまつわるストレスフルな出来事の意味や評価、子どもが身につける対処方法を考察することで、なぜ、離婚した子どもの中にひどい不適応障害を引き起こす子どもがいるのか、この問題は家族の最も重要な機能が不全となった場合に、子どもに与える影響が、一人の人間の人生を狂わすほどに過酷なものであることを意味している。家族内外の崩壊、家庭内部では家族の死亡、養育者が変わる、または養育者の恋愛関係の変化、家族外部では養育者の失業、転職、移転など家族が子どもにとって安全かつ最も凝集性の高い場所でなくなることに問題がある。

今日の家族機能不全による子どもの心理的危機状況は更に深刻化している。離婚によって引き裂かれた子ども達、離婚することによって母、または父に恋愛関係が生じて子どもが邪魔になり、子殺しの温床にもなっている事例がいくつもみうけられる。

科学的に応用された犯罪心理学における最初の子殺し事件は、指紋鑑定の結果判明した事例である。それまで、人間の指紋がただひとつしかないという事実は不明であった。指紋識別が各人異なることを発見したのは1860年にインド政府の管理官ハーシェルが年金受給者識別において、同じ指紋は決して二つとないことを発見したことがきっかけである。受給者のほとんどが文盲であった当時のインドでは指紋押捺によって年金を受給していた。彼はその指紋を見て同じ指紋は二つとないことを発見した。しかし、もう一人のスコットランドの学者フォールズが同じことを発見し、「ネイチャー」に発表するに及んで、どちらが先に発見したかという論争を「ネイチャー」誌上で争った。それを読んだイギリスの遺伝学者フランシス・ゴールトンは統計学者ケトレの教えを受け継ぎ、指紋研究が遺伝学と関連が深いのではない

かと察し、指紋研究に取り組み、1890年に著書「指紋」を出版した。

ゴールトンはまさにリエゾン型の研究者で、あらゆる分野に精通しており、筆者が興味を覚える分野には必ずゴールトンが存在した。

それはさておき、指紋が決め手となった最初の事件はアルゼンチンにおける幼児殺害事件である。フランチェスカ・ロハスという名の26歳の女が隣家に駆け込み「子どもが殺された」と告げた。彼女の４歳と６歳の子どもがベットで頭部陥没の状態で死んでいた。彼女はベラスケスという名の男が自分に言い寄り脅迫していた事実を告げ、彼が犯人であると主張した。彼女がベラスケスではなく別の男と結婚したいと思っていた矢先の事件である　しかし、ベラスケスは彼女を脅迫したことは白状したが、子どもを殺したことは否認した。一人の優秀な警察官がいた。アルバレスという名のアルゼンチンの国家警察の警部で、この事件を解決するために派遣されたのである。彼はゴールトンの「指紋」を熱心に読み独自の指紋体系を確立した人物である。アルバレス警部はフランチェスカの住んでいる家に行き、ドアに血のついた親指の指紋を発見した。彼は血染めの指紋のついたドアの一部分を切り取り、仔細にその指紋を調べ、フランチェスカの指紋と照合した結果、同一のものであることを突き止めた。ついにフランチェスカは自白した。動機が「ある若い男と結婚したかったが、彼が子ども達を嫌った。そこで、自分の子どもを殺した」というものである。子どもを取るか、男を取るかで女が子どもを殺害する事例は多々ある。指紋や血液型が犯罪捜査にまだ援用されていなかったときに、初めて血液型と指紋から犯人を突き止めた最初の事例である。

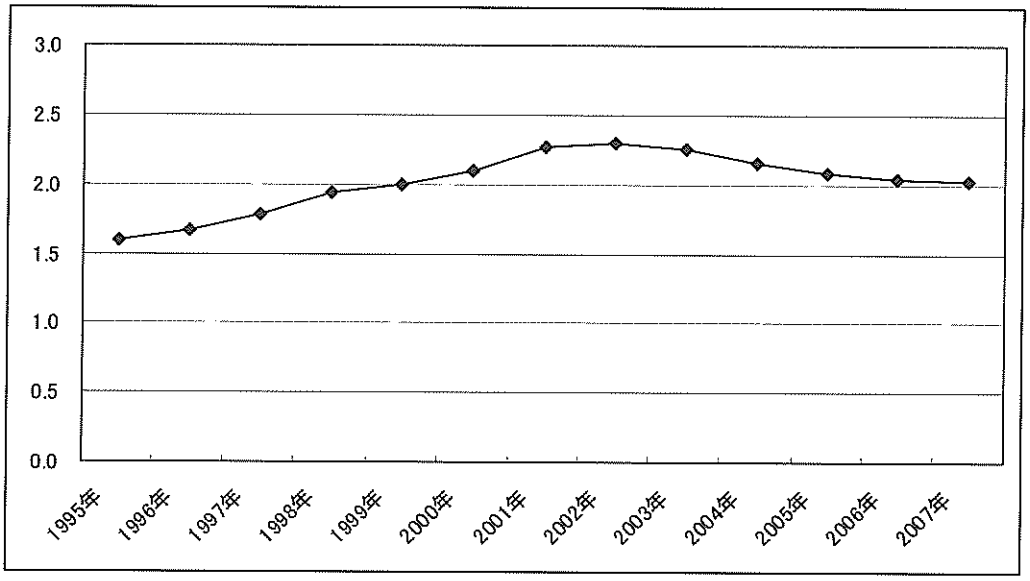
このようにリエゾン心身処方学の決定的な核心部分は家族関係の中の最も悲惨な現実を、その家族関係に起因する様々な出来事を通して知ることである。

すると、今日の家族関係における回復不能とも思える様々な現象が誇張され、社会全体が崩壊の一途を辿っていると錯覚するまでに、多くの人々は神経質になった。だが、基本的に人類はその起源において多くの困難な事態に遭遇し、様々な苦難を克服しながら、今日に至っていることを理解するべきである。

人類はそれほど簡単につぶれるものではない。報道メディアがけたたましく報道する親子殺しも孤独死や虐待も、いつか通ってきた道の途上で生じた出来事に比較すれば、それほど脅威を感ずるものではない。様々な学問の発展がわれわれに与えた多くの貢献はこれらの問題を解きほぐす有効な手段となる。

２：「離婚」が子どもに与える影響に関するリエゾン心身処方学

人はキャリア・ウーマンが量産され、夫が会社を解雇されたときになって初めて、家族がある一定の規約の元に形成され、性役割行動が自然な家族関係の形態であったことに気付くようになる。女性解放運動が起こり、女性の社会的進出がめざましい勢いで社会に流れ出したとき、これまで男社会で全てが運用されていた社会が変質し、男女均等雇用ののろしが上がったときでさえ、男たちは子供に対する興味関心が薄く、仕事中毒の果てに燃え尽きるまで、自分に与えられたノルマを完遂しようと頑張っていた。しかし、社会は次第に変質し、図１に示されるように、2001年から離婚率が急増し2003年までの３年間に上昇し続けた。2004年を境に少しづつ離婚率は減少しているが、20世紀の後半から始まった離婚の上昇には、「出来ちゃった結婚」という流行が男女の結婚の形態を崩し、子どもができればやむなく結婚する、望まれない子供であっても生むほかない、それゆえに結婚するという社会的流行と離婚率の高さは比例して上昇している。今日の社会では、男はストレス解消のための喫煙も、疲れた身体を一時休めるために飲むビールの量も減らされ、健康維持のために、過度の禁止条例が出された。子育てと称して父も母も同じように子どもと対峙しなければならなくなった。それは一昔前までは考えられないことであったが、今では「イクメン」という名の父親の子育て教室が作られ、それまで子どもに無関心であった男も必然的に子どもに関心を持たざるを得ず、それは次第に家族形態の中に溶け込んでいった。最早、子どもは母の所有物ではなくなり、父親と共同で育てる特産物となってしまった。これまでの精神分析的アプローチは



（日本統計年鑑，総務省統計局，2010）

図１　日本における離婚率の年次的変化

おおむね母子関係の愛着理論が主体であった。父親は子どもが生まれたときはほんの端役に過ぎなかったが，しかし，今ではすでに、生後３ヶ月から父なる存在が乳児の前に姿を現すようになった。すでに、そのとき母なる存在は社会の歯車となって働いているのである。この時点で、時代は過酷にもこれまでの発達心理学における理論の転覆を強いることになる。

子どもになじめない父親は次第に妻や子を捨て流浪の旅へと旅たつことを考え、子どものことしか考えられないように作られた母は子どもを一人で育てなければならない羽目になった。そこで、社会は彼女に支援の手を伸ばすべきであるにも関わらず、それを見過ごしてしまい、疲労困憊となった母親は子供から自由になりたいと考え、子どもを捨て餓死させるという事件が起こったりする。これまでの社会はこれほどまでに驚くべき事態を近隣の住民が黙殺することはなかった。泣き喚く飢えた子ども達の声を近隣の誰かが注目して、自らそこに出かけるか、児童保護センターに連絡するか、警察に通告するかの行動をとっていたのではないだろうか。しかし、仮にこのような行動を近隣の誰かが取ったとして、行政はこの子ども達を助けることが出来ない。

精神医学者斉藤学によれば、「児童虐待の問題にとりくみだしてから、新聞が官報に過ぎないことを知った。児童虐待法が使えないどころか、子殺しに加担している事など、一般の人は知らないだろう。NHK はもちろんのこと、民放テレビの独占利権を総務省に握られたマスコミが官僚と癒着せざるを得ないことを世間は十分に理解すべきである」。(2010、9 月、北陸中日新聞)

今日の時代風景は近所づきあいを嫌い、一軒の家、マンションの一室に閉じ篭って他者との付き合いを封じ込めた母親が一人で子どもを育てることを余儀なくさせてしまう傾向が強まっている。母子家庭となって生活保護を受ける母は、男に捨てられた女のエレジーを他者に隠すことを無意識が強いるのである。彼女は必ずしも他者に同情を得ることを好まず、自分に与えられた運命の過酷さを他者に隠そうとする。離婚して母子家庭になった母は子どもの心の傷に気付くことなく、他者の目を畏れ、自分の生活を他者の目から隠し、部屋の中に子どもと一緒に閉じこもる。さらに、上述の斉藤学医師の見解を述べてみよう。

「青年期の引きこもりや自殺願望について、親が悩んで相談に見える。精神科医はそこで家族介入が始まる。これは必ずしも精神科医でなければできないというものではない。地域に根づいた人、たとえば、近隣の心理セラピストと精神科医の連携が望ましい。しかし、日本の臨床心理学教育は医師との連携に無頓着のように見えるので、十年

越しの長期計画でアメリカの修士コースを日本に導入することに力を注いできた。それがようやく実を結び、卒業生が各地で開業し始めている。北海道網走のホテルで行われたワークショップには様々な問題を抱える人々が集まり、仕事も軌道に乗ってきたようだ。このワークショップに集まる人々は、数年の出会いを繰り返すうちに「家族」のようになった。この「問題縁」集団を私はひそかに「魂の家族」と呼んでいる」。

斉藤学医師のように「魂の家族」となってゆく悩める人々を救済するための方法を真剣に考える医師や臨床セラピストが多くなれば、地域の中で、問題を抱える人たちが気楽に集まり、「魂の家族」となってゆく、その活性化を筆者も強く望むものである。そのためには、臨床心理士のあり方、精神科医師との連携、はたまた、リエゾン精神看護師とのかかわりを今後積極的に推進し、臨床発達心理学がリエゾン心身処方医学の一部として、地域支援に貢献することが期待される。

３：リエゾン心身処方学の理論的枠組

先の研究で、リエゾン心身処方学の概念と方法を試験的に提示した。必ずしも、それだけでは十分ではないことは承知している。なお、リエゾン心身処方学では「哲学」的思索を重んずるあまり、具体的で臨床的な事例をややもすれば置き去りにする傾向がある。何度でも、概念と方法は繰り返し検証されるものである。たとえば、がん患者に対する「癌哲学」外来を訪れる患者はすでに最初に訪れる、痛み・呼吸困難・などの身体的痛みを通り越している。それに伴う食欲不振・嘔吐・倦怠感なども克服し、服薬の後遺症である、せん妄・気分障害などの精神疾患、更には死に対する不安や恐怖などの心のケアも克服している患者の訪れるところである。決してそこを訪れることのない患者も多々ある。がん患者が心のケアだけで安らかな死を迎えるのならばそれでも良い。しかし、決してそれだけでは満足しない患者もいる。特に、がん患者にはそれだけでは決して満足しないタイプがある。柳田邦男（１９９２）はそれを患者の個性ないしは個別性と呼んだ。それはこれまでの人生と対峙したときに生ずる実存的な痛みの苦しみに相当する。人生の完成への支援を求めるやるせない患者である。「人生は未完の生」であるとドイツの哲学者ハイデッガーは主張した。未完であるがゆえに完成したいという要求が個々の患者におとづれるとしたら、おのれの人生の完成を望む患者が増えるとしたら、彼らは自分の人生の完成を成し遂げる後継者を見つけなければならない。高等教育者は未完の仕事（人生）を託すことの出来る優秀な学生を求める。それは連鎖的に大きな仕事へと近づき、次第に完成の高みへと広がってゆくものだ。しかし、凡庸な人の求める人生の完成への欲求とは何であろうか。この世で遺り残した仕事を誰が継承するのか。この悩みを悩む人々が近年多くなった。それは少子化と共に高まる中で生じた、家族を持たない孤独な人間に多く見受けられる現象ではないだろうか。自分の仕事を継承してくれるのは子どもであり、あるいは養子であろう。だが、現在ではそのように親の仕事を継承しようとする人間は数少ない。そのために襲ってくる人生の完成を実感したいと欲する患者が、自己満足でも良いからその問題を解決したいと考え、癌哲学外来を訪れるのである。もし可能ならば、そのような人たちの連携リエゾン的集団が一丸となって「魂の家族」となるべく、ワークショップを逐次、開催しながら、問題を持つ個々の人間に対して次第に未完の人生に関する達成感を高めるような意識に変容してゆくことが出来るかもしれない。時代の変化と共に、家族形態の変化は次第に変質してゆく。そうした時代の変容の前で、さりながら地域支援を声高に叫んでも空しく木霊して、一向に児童虐待や孤独死の数が下らないとすれば、そのような事態に対する救済になるかもしれない。図２はリエゾン心身処方学をトポロジカル３次元空間にそのトーラスを表現したときに考えた図である。中核となるのは形而上学一般における哲学的空間となる。生きることとは何かを定義しながら、自らの人生を回顧することの出来る状況である。その周りを囲むのは生命倫理・死生学・倫理学であり、続いてその回りを取り巻くトーラスを心理学・教育学、外円を取り巻くのは医学全般・看護学である。

大雑把にいえば、このような魂の問題を取り扱う分野で構成されるトーラスに社会・経済・法学やその他の自然科学が入っていないが、これらは

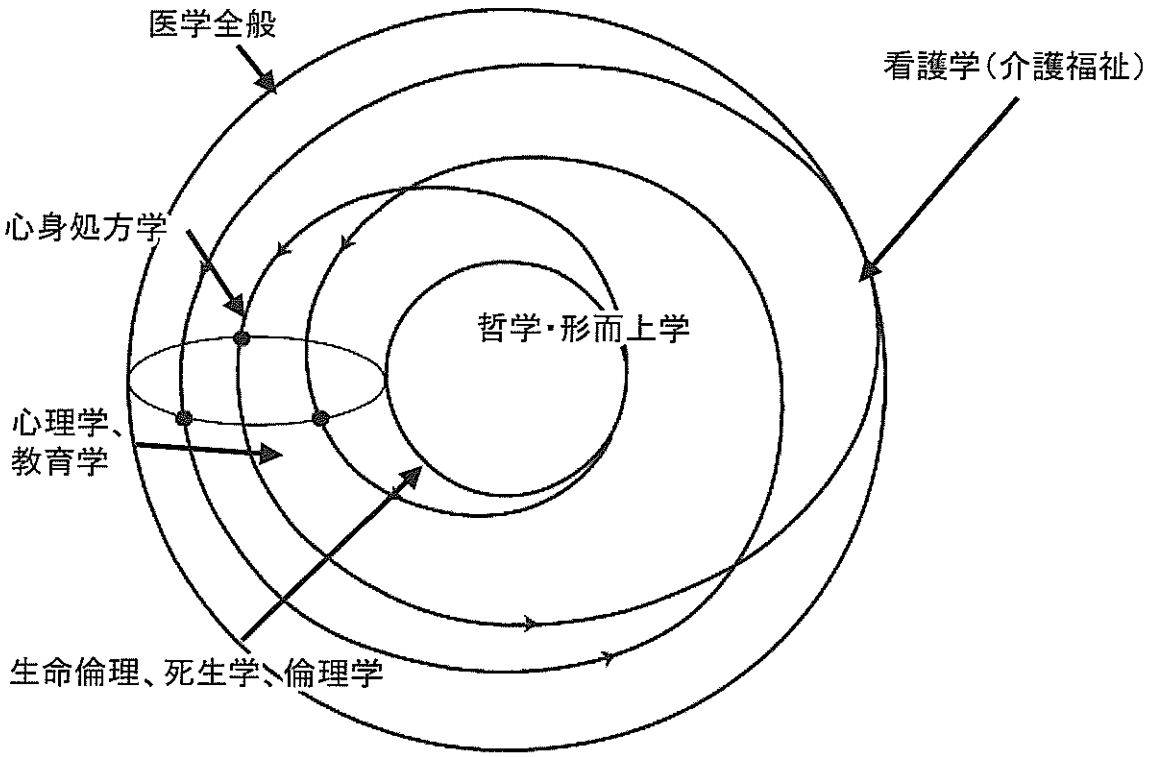


図２　リエゾン心身処方学におけるトポロジカル３次元空間的表現

３つのトーラスを形成する諸分野に不即不離に関与していることを忘れてはいけない。

おわりに

臨床発達心理学においては、もっぱら子どもは誕生したときから母子関係、母子紐帯と呼ばれる愛着行動を通して成長するものであると考えている。それゆえ、われわれは、母親が子どもを出産すれば少なくとも９ヶ月は子どもに付き添い子どもとの連帯関係を綿密にしてゆくものであると考えてきた。しかし、今日の社会風潮は出産して３ヶ月で母親は子どもを手放し、父親がそこに介入することになった。だが、いまだ、父子関係に関する適切な理論がない。如何に社会において「イクメン」を養育する教室が出来ても、父子関係は母子関係ほどには密接な関係には及ばず、多くを語ることは稀である。せいぜい父親の出番は子どもが4，5歳になって道徳的躾をしなければならないときに登場してもらうのが通例の発達心理学である。発達心理学はその時代の作った様々な変動を背負いながら、母子関係や父子関係の成り立ちを考える学問であろう。永遠普遍の哲学も理論も存在しないとすれば、一体そこに何がのこるのか。人はしだいに世界の中心に存在する何ものかの強い意思に支えられながら生きている事を認識するようになる。現代人の多くが共同で作り上げた社会に裏切られた社会的孤児であり、一人ひとりが個々の生き方を模索しながら「考える人」になる、そんな時代の到来を予感する。

＜参考文献＞

池田由子　1989　引き裂かれた子どもたち　－親の離婚と子どもの精神衛生－、弘文堂

丸山久美子編著　2008　21世紀の心の処方学－医学・看護学・心理学からの提言と実践－、アートアンドブレーン

丸山久美子　2009　リエゾン心身処方学の概念と方法「北陸学院大学紀要」第２号、NO.2，55-60

カミングス、E.M.，他　2000　（菅原ますみ監訳）　発達精神病理学－子どもの精神病理の発達と家族関係－、ミネルヴァ書房